

うつむきは虚偽自白のはじまり？

—身体姿勢と同調傾向が潜在的・顕在的態度に与える影響—

Looking-down posture leads to false confession:

The effect of body posture and traits of conformity on explicit and implicit attitudes

藤 桂[†], 永井 聖剛[‡]

Kei Fuji, Masayoshi Nagai

[†]筑波大学, [‡]愛知淑徳大学, 産業技術総合研究所

[†] University of Tsukuba, [‡] Aichi Shukutoku University, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)
k-fuji-3@human.tsukuba.ac.jp

Abstract

This article examined the effect of body posture on explicit and implicit attitudes in false-confession situations. On the basis of earlier findings in the area of embodied cognition, we hypothesized that participants who adopt a looking-down posture are likely to confess falsely, despite not having committed a crime, compared to those who adopt a looking-up posture. In our experiment, participants engaged in an implicit association test (IAT) measuring submissive attitudes at the implicit level before and after the manipulation of body posture (looking-up or -down); they also answered a questionnaire about decision making in false-confession situations while maintaining their posture. The result showed that adopting a looking-down posture enhanced submissive attitudes at the implicit level compared to adopting a looking-up posture and indicated that the effects of body posture on explicit attitudes are moderated by traits of conformity.

Keywords — false confession, embodied cognition, body posture, implicit association test (IAT)

1. はじめに¹

近年, 本当は罪を犯していないにも関わらず, 自分が犯したと認め自白してしまう“虚偽自白”が深刻な社会問題となっている。浜田(2005)は, 虚偽自白は特殊な現象ではなく, 誰にでも起こりうる現象であると説明している。また, 警察庁(2012)や日本学術会議(2011)でも, 虚偽自白が発生する恐れのある“取り調べ”に関して, その適正化を大きな課題として言及している。この問題に対し, これまでの研究(Kassin & Kieschel, 1996; Davis, Leo, & Follette, 2010 など)では, 被疑状況の曖昧性

や目撃者の有無, 取り調べ役の態度など, 虚偽自白を促す社会的・状況的要因に関してさまざまな検討がなされてきた。

これに対し本研究では, 虚偽自白をもたらす要因として, Riskind & Gotay(1982)や Stepper & Strack (1993)などの Embodied Cognition に関する研究に基づき, “身体姿勢”に着目した。これまでの研究において, 深く頭を下げ身体を前に倒す前屈姿勢を取ることで, 課題遂行における根気の低下 (Riskind & Gotay, 1982), 課題成績フィードバック時における自尊感情の低下 (Stepper & Strack, 1993) が生じることが明らかにされてきている。これらの知見を拡張すれば, 前屈姿勢になることで, 取り調べ場面においても, 無罪を主張し続けようとする意欲が低下し, 最終的には相手からの追及に屈服し, 虚偽自白を行いやすくなると予測される。そこで本研究では第一に, 場面想定法を用いて, 身体姿勢の操作が, 虚偽自白場面における態度および意思決定に及ぼす影響を検討する。またその際に, Implicit Association Test (IAT; Greenwald & Farnham, 2000)を用いることで, 潜在的態度の変化にも着目し, 前屈姿勢を取ることによって潜在的水準での屈服感が高まるかどうかについても検討を行うこととする。

また, 身体や姿勢がもたらす影響は, その個人が置かれている社会的状況によって異なる可能性も示されている (Roberts & Arefi-Afshar, 2007; Schbert, 2004)。これらを踏まえれば, 例えば, 他者に対する同調傾向が低く, 他者や

¹ 本研究の実施に際して, 筑波大学心理学類卒業生の中川慧介氏より, 多大なご協力を頂きました。ここに記して深く御礼申し上げます。

周囲への迎合を行わない者にとっては、前屈姿勢は“相手の発言を無視し、自分の世界に閉じこもる”という意味の姿勢として解釈され、その方向性に沿って意思決定や態度形成がなされる可能性も予測される。この可能性に基づき、本研究では第二に、他者および周囲への同調傾向の程度によって、身体姿勢による影響が調整されるかを検討する。

2. 方法

実験参加者 男子大学生 26 名(平均 19.54 歳, $SD=1.14$; 直立条件 14 名, 前屈条件 12 名)。

実験計画 潜在的態度に関しては、姿勢条件(直立 vs 前屈) × 時期(pre or post) の 2 要因混合計画であった。一方、顕在的態度に関しては姿勢条件(直立 vs 前屈) の 1 要因被験者間計画であった。

測定内容 (1)潜在的態度(潜在的屈服感): Greenwald & Farnham(2000)を参考に作成した、潜在的水準での屈服感を測定するための IAT を用いて測定した。この IAT では、“自己-他者”と“屈服-抵抗”の 2 軸を設定した。予備調査(男子大学生 20 名; 平均 19.7 歳, $SD=1.96$)の結果に基づき、屈服カテゴリの刺激語として“服従”, “降伏”, “降参”, “従属”, “従う”の 5 語, 抵抗カテゴリの刺激語として“抗議”, “反抗”, “抗戦”, “逆らう”, “抗う”の 5 語を選定し、用いた。また, Greenwald & Farnham(2000)を参考に、自己カテゴリの刺激語は“自分”, “自分は”, “自分の”, “わたしは”, “わたしの”の 5 語, 他者カテゴリの刺激語は“他人”, “他人は”, “他人の”, “だれかは”, “だれかの”の 5 語を用いた。

(2)顕在的態度(虚偽自白場面での意思決定): Kassin & Kiechel(1996)の実験状況に基づいて、場面想定法による質問項目を作成した。具体的には、“実験室において、実験者から、コンピュータを用いた課題に取り組むよう指示された。またその際、機器が故障するため、Alt キーは絶対に押さないようにという注意を受けた。し

ばらくの間、課題に取り組んでいたが、開始からしばらくした頃にコンピュータがフリーズしてしまった。ほどなく実験者が現れ、あなたが禁止されていた Alt キーを押したことでフリーズしたと強く主張し、あなた自身の過失であると認めるよう要求してきた。しかし、あなたは Alt キーには一切触れていない”という場面を質問紙上で提示し、この状況に対して“何があっても自分の非を認めてはいけないと思う”という項目について尋ねる(6 件法)ことで、顕在的水準での意思決定を確認した。

(3)葛西・松本(2010)の同調行動尺度 23 項目(5 件法)。

(4)姿勢維持時の困難度(“まったく大変でない” ~ “とても大変だった”の 6 件法)。

実験手続き (1)潜在的屈服感(pre)の測定: 参加者は、まずニュートラル姿勢(椅子に深く腰掛け、背中を軽く背もたれにつける姿勢)をとるように教示され、その姿勢で潜在的屈服感を測定する IAT 課題を行った。IAT 課題は全部で 7 つのブロックから構成され、いずれのブロックにおいても、コンピュータディスプレイの中央に提示される刺激語が、左右どちらのカテゴリに属するかを弁別し、キーを押して回答するという課題を実施し、各試行の反応時間を ms 単位で記録した。回答には“E”と“T”を使用し、左右の人差し指で押すように求めた。1 ブロック目は“自己-他者”を弁別する練習課題 20 試行, 2 ブロック目は“屈服-抵抗”を弁別する練習課題 20 試行, 3 ブロック目は 1・2 ブロック目の 2 対のカテゴリを組み合わせた弁別課題(練習試行) 20 試行, 4 ブロック目は 3 ブロック目と同一の本試行 40 試行であった。5 ブロック目では 2 ブロック目の“屈服-抵抗”の配置が左右逆転された状態で弁別する練習課題 20 試行を行い, 6 ブロック目は 4 ブロック目の“屈服-抵抗”の配置のみが左右逆転された状態で弁別する課題(練習試行) 40 試行, 7 ブロック目は 6 ブロック目と同一の本試行 40 試行であった。組み合わせ課題を実施するブロックに関して、“自己-

屈服・他者－抵抗”あるいは“自己－抵抗・他者－屈服”のどちらを先に実施するかは、カウンターバランスを取った。全ブロックにおいて、回答が間違っている場合には“×”をディスプレイ上に呈示することで誤答へのフィードバックを行い、“×”が表示された場合はすぐに正解のキーを押すよう教示した。

(2) 姿勢操作：その後、条件ごとに異なる姿勢（直立・前屈）を作る練習をしたうえで、その姿勢を3分間維持するよう求めた。直立条件では、背中を背もたれに付けずに浅く座り直し、手は膝の上に乗せ、背筋を伸ばして顔を前に向けるように教示した。一方、前屈条件では、背中を背もたれに付けずに浅く座り直し、手は膝の上に乗せ、肩を丸めながら前に深く屈み、首を丸めて顔を下に向けるように教示した。

(3) 潜在的屈服感 (post) および虚偽自白場面での意思決定の測定：続いて、そのままの身体姿勢をとりながら、実験参加者の視線がコンピュータ画面に対して垂直になるように机の高さおよびディスプレイの角度を調節したうえで、(1)と同様の IAT 課題を行った。さらに、虚偽自白に関する場面想定法の質問項目に回答するよう求めた。

(4) 同調傾向等の測定：その後、ニュートラル姿勢に戻り、同調傾向や姿勢を維持していた時の困難度に関する項目などに回答するよう教示した。最後に、デブリーフィングを実施し、実験を終了した。

3. 結果

潜在的屈服感得点の算出 参加者ごとに“自己－屈服・他者－抵抗”ブロック 40 試行と、“自己－抵抗・他者－屈服”ブロック 40 試行の平均反応時間を算出した。また、弁別課題における反応時間の個人差を統制するために、個人の平均反応時間からのズレの割合という形で数値化される基準化手続きをとった。具体的には、“自己－屈服・他者－抵抗”ブロックのそれぞれの平均反応時間から、両ブロックを合わせた平均反応時間の差をとった。続いて、その差を、両ブロックを合わせた平均反応時間で除し、基

準化得点とした。さらに、“自己－抵抗・他者－屈服”ブロックの基準化した数値から、“自己－屈服・他者－抵抗”ブロックの基準化した数値を差し引いて、この数値を IAT score、すなわち潜在的屈服感得点とした。潜在的屈服感得点の値が大きいほど、“自己”と“屈服”、“他者”と“抵抗”の連合が、“自己”と“抵抗”、“他者”と“屈服”の連合よりも強いことを意味する。換言すれば、潜在的屈服感得点の値が正の方向に大きいほど、より屈服感が喚起されていることを示す。

身体姿勢が潜在的態度に及ぼす影響 潜在的屈服感得点を従属変数として、姿勢条件を参加者間要因、姿勢操作の前後を参加者内要因とする 2 要因混合計画分散分析を行ったところ(Figure 1)、交互作用が有意傾向であった($F(1,24)=3.34, p<.10$)。そこで単純主効果検定を行った結果、姿勢操作を行った後の時点(post)において、直立条件と前屈条件の間で有意差が認められた($p<.05$)。したがって、前屈姿勢を取ることで、潜在的な水準での屈服感が高まることが示された。

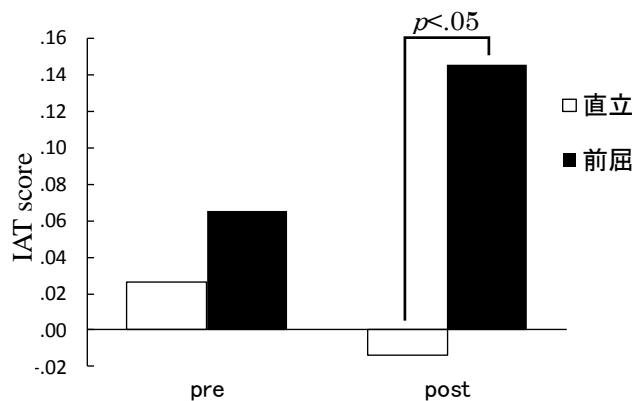


Figure 1. 身体姿勢が潜在的態度に及ぼす影響。

身体姿勢が顕在的態度に及ぼす影響 虚偽自白場面における意思決定についての項目（“何があっても自分の非を認めてはいけないと思う”）に対する評定値を従属変数として、姿勢条件間での t 検定を行った結果、有意差は示されなかった ($t(24)=1.09, n.s.$)。しかし、同調傾向 23 項目の合成得点を算出し、26 名全員の平均値 (2.85) を基準として同調傾向高群と低群に分割したうえで、姿勢条件と同調傾向を

要因とする 2 要因被験者間分散分析を行った結果 (Figure 2), 交互作用が有意であった ($F(1, 22)=4.54, p<.05$)。単純主効果検定を行った結果, 同調傾向低群において, 直立条件と前屈条件の間で傾向差が示された ($p<.10$)。また, 前屈条件において, 同調傾向低群と高群の間で有意差が示された ($p<.05$)。ゆえに顕在的水準においては, 前屈姿勢を取ることによって生じる影響は同調傾向の程度によって異なることが明らかとなった。²

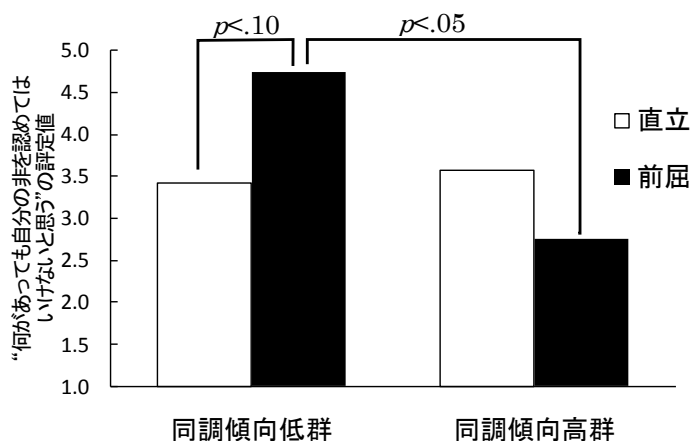


Figure 2. 身体姿勢が顕在的態度に及ぼす影響。

姿勢維持の困難度 直立条件と前屈条件の間で, 姿勢維持時に感じていた困難度について t 検定を行った結果, 有意差は示されなかった ($t(24)=1.55, n.s.$)。したがって, 上記の結果は, 姿勢操作に伴う困難度の違いによるものではないことが確認された。

4. 考察

本研究より, 身体姿勢を操作することで, 虚偽自白場面における潜在的・顕在的態度に変化が生じることが明らかとなった。

より具体的には, 潜在的水準において, 前屈姿勢は直立姿勢に比べ, 屈服感を高めることが示された。

しかし顕在的水準では, 前屈姿勢は一律に屈服的な意思決定を促すわけではなく, 同調傾向が低い者においてはむしろ, 抵抗的な態度の形成をもたらすことも示された。すなわち, 身体姿勢によって形成された潜在的態度は, そのままの形で顕在化し意思決定を左右するわけではなく, 個人の同調傾向の程度, ひいてはその姿勢に対する解釈のあり方によって調整されながら顕在化していく可能性が示唆された。

これらの結果を踏まえれば, 今後は, 姿勢そのものの, ひいては姿勢に影響を与えるような取調室の環境もまた, 虚偽自白に対して一定の影響を及ぼすものであると捉え直していく必要がある。したがって, 身体心理学や環境心理学の観点を含めながら, 虚偽自白の問題や取調べ場面の適正化に取り組んでいくことが求められる。

今後の課題として, 実験参加者数をより増やすとともに, 身体姿勢操作による影響を調整するような他の要因や特性についても検討していくことが望まれる。

5. 引用文献

- [1] 浜田寿美男(2001). 自白の研究—取調べる者と取り調べられる者の心的構図—北大路書房
- [2] 警察庁(2012). 捜査手法・取り調べの高度化プログラム 2012年3月29日 <http://www.npa.go.jp/sousa/kikaku/20120329_1.pdf> (2013年7月7日)
- [3] 日本学術会議(2011). 科学的根拠に基づく事情聴取・取り調べの高度化 2011年9月28日 <<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t133-9.pdf>> (2013年7月7日)
- [4] Kassin, S. M., & Kiechel, K. L.(1996). The social psychology of false confessions: Compliance, internalization, and confabulation. *Psychological Science*, Vol. 7, pp. 125-128.
- [5] Davis, D, Leo, R. A., & Follette, W. C.(2010). Selling confession: Setting the stage with the “sympathetic detective with a time-limited offer”. *Journal of Contemporary Criminal Justice*, Vol. 26, pp. 441-457.

² なお, 身体姿勢による潜在的態度への影響もまた, 同調傾向によって調整されるかどうかを検討するため, 姿勢条件および同調傾向の高低を被験者間要因, 姿勢操作の前後を被験者内要因とする 3 要因混合計画分散分析を実施した。その結果, 前述の結果と同様, 姿勢条件と姿勢操作の前後の交互作用が有意傾向であったが ($F(1,22)=3.50, p<.10$), それ以外はいずれも有意ではなかった。したがって, 潜在的水準においては, 同調傾向による調整効果は生じていないものと考えられる。

- [6] Riskind, J. H., & Gotay, C. C.(1982). Physical posture: Could it have regulatory or feedback effects on motivation and emotion? *Motivation and Emotion*, Vol. **6**, pp. 273-298.
- [7] Stepper, S., & Strack, F.(1993). Proprioceptive determinants of emotional and nonemotional feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. **64**, pp. 211-220.
- [8] Greenwald, A. G., & Farnham, S. D.(2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. **79**, pp. 1022-1038.
- [9] Roberts, T.A., & Arefi-Afsha, Y.(2007). Not all who stand tall are proud: Gender differences in the proprioceptive effects of upright posture. *Cognition & Emotion*, Vol. **21**, pp. 714-727.
- [10] Schbert, T. S. (2004). The power in your hand: Gender differences in bodily feedback from making a fist. *Personality and Social Psychology Bulletin*, Vol. **30**, pp. 757-769.
- [11] 葛西真紀子・松本麻里(2010). 青年期の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成— 鳴門教育大学紀要, Vol. **25**, pp. 189-203.